



ナガサキ ピース・タイムズ

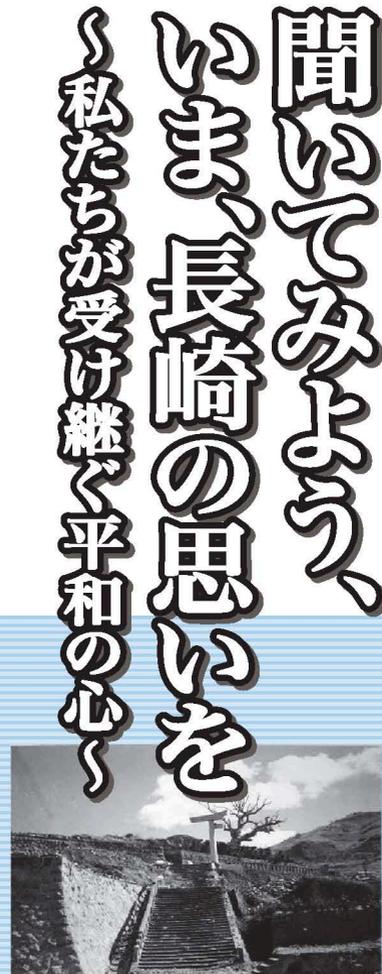
発行者【PUBLISHER】
日本非核宣言自治体協議会
(にほんひかくせんげんじちたいきょうぎかい)
〒852-8117 長崎県長崎市平野町7番8号
長崎市 平和推進課内
電話 095-844-9923 FAX:095-846-5170
E-mail info@nucfreejapan.com
ホームページ http://www.nucfreejapan.com

NAGASAKI PEACE TIMES

【非核協】おやこ記者新聞



山王神社被爆クスノキの下に集まった全国8府県のおやこ記者



被爆後のクスノキと一本柱鳥居

聞いてみよう、 いま、長崎の思いを 私たちが受け継ぐ平和の心



当時の看板を見るデルノアさん夫婦
(写真提供/ (株)長崎文献社)

パトリシア・マギーさんのお父さん、ビクター・E・デルノアさんは昭和

長崎を愛した父の 思いを継いで 私がナガサキベイビーです



核兵器廃絶を目指して活動するマギーさん



マギーさんを迎えて行なわれた除幕式

21年にGHQ進駐軍本部司令官として長崎に来ました。当時は原爆投下後の混乱が続いていて、原爆についての発言や行動は禁止されていました。現在の平和祈念式典にあたる「文化祭」を開くことを許すなど、市民の復興への思いに協力しました。長崎の人たちはデルノアさんを尊敬し、昭和24年に長崎を離れる時には、仕事に行く時通っていた道を「デルノア通り」と名付けました。

で、マギーさんの誕生は人々に希望を与えました。デルノアさんから「ナガサキベイビー」と呼ばれていたマギーさんは、どんな状況でも新しいスタートを切ることができるといふ思いが「ナガサキ」に込められているの



パトリシアさんと夫のジェームズさん

今年、新しく看板と説明板を付け直すことになり、除幕式に出席するためにマギーさんは3年ぶりに長崎に来ました。マギーさんは昭和23年、長崎で生まれました。たった一発の原爆でめちゃくちゃになった長崎



長崎の自宅でくつろぐデルノア一家
(写真提供/ (株)長崎文献社)



なごやかに行なわれたおやこ記者取材

「沖野雅季・京子記者」「高橋侑臣・志穂子記者」

たのが心に残りました。いて学ぶことがとても大事なことだと思っていて、小学生記者が取材にきてくれたのでとても嬉しかったと言ってくださ

話をするのが大切だと話してくれました。核兵器や戦争についてみんなが考えること、話すことが必要と思っているそうです。若い人が平和について学ぶことがとても大事なことだと思っていて、小学生記者が取材にきてくれたのでとても嬉しかったと言ってくださ

で、「ナガサキベイビー」と呼ばれることを誇りに思っているそうです。デルノアさんはいつても、「人類を破壊に導く核兵器は、二度と使ってはいけない」と言っていたそうですが、マギーさんも思いは同じだそうです。反核運動を拡げるには特別な方法ではなく会話をすることが大切だと話してくれました。核兵器や戦争についてみんなが考えること、話すことが必要と思っているそうです。若い人が平和について学ぶことがとても大事なことだと思っていて、小学生記者が取材にきてくれたのでとても嬉しかったと言ってくださ





約5900人が参列した69回目の長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典は、心配された台風の影響もなく、亡くなった方たちの冥福を静かに祈ることができました。

平等に生きる 平和は宝物

藤沢市・鈴木市長にお会いして

核兵器のない世界を目指して活動している日本非核宣言自治体協議会の設立30周年記念大会が今年の6月、神奈川県藤沢市で行われました。開催地となった藤沢市の鈴木恒夫市長が長崎



鈴木恒夫藤沢市長

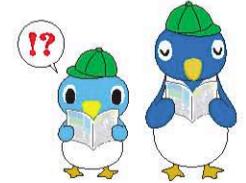


鈴木市長とおやこ記者

の平和祈念式典に参列されたので、取材しました。市長さんが思う『平和』とはどういうものかとの問いに、「人と人が尊重し合い、仲良く生きられること」と話してくださいました。核兵器はな

していくべきという市長さんの言葉を聞き、僕ができる平和な世界への第一歩として、『家族を大切にし、友達とはケンカしない』『思いやり、尊敬し合うことの大切さ』を伝えていこうと思いま

【上原龍樹・晶子記者】



写真で伝える戦争の悲惨さ

35年間の原爆資料調査



伝える手段について語る深堀さん

公益財団法人長崎平和推進協議会の写真資料調査部会長の深堀好敏さんに話を伺いました。長崎市出身で、被爆当時16歳だった深堀さんは、昭和40年代から8年ほど、おもに県外の高校生に対して語り部活動を行っていました。でも、写真のほうはより説得力があると感じたことから、35年間で、約3000枚以上の写真を整理し、資料として

しかし、昭和20年8月9日〜10月半ばにかけての写真はほとんど残っていないので、「被爆直後のことは、被爆者として体験を語ることでしか、伝えたり証明したりできない」とも感じたそうです。

写真も語ることも同じように、両方とも多くの人に伝える手段であるということが、よくわかりました。僕も伝える術を考えて、多くの人に広めていきたいと思えます。

【切山亮太・美樹記者】

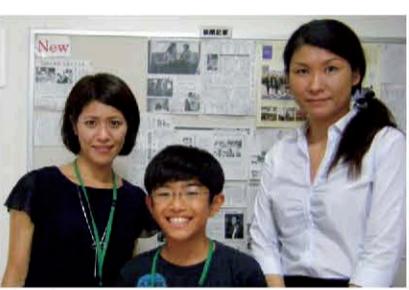


長崎大学准教授の中村桂子さん

核兵器廃絶は 解決できる問題の一つ 核兵器のない世界へ

長崎大学核兵器廃絶研究センターの中村桂子さんは、核兵器はなくせると考えています。

「この数十年で、世界の差別や偏見に対する考え方が改善した。同様に、核兵器があるから平和だ



中村さんとおやこ記者

と考える国や人が、非人道的な核兵器はいらないと考えることができれば、核兵器はなくせると話してくれました。大学生の時、「世界をよりよいものにするために何ができるだろう」と考えたことがきっかけで、今の仕事に就いたそうです。

小学生に核兵器の問題は難しく、僕には何もできないと思っていました。中村さんはわかりやすく説明してくれました。平和や

核兵器について学び、考えたことを一人でも多くの人に伝えることは、僕にもできると思いました。



集めた写真の説明を受ける記者



母・姉・弟を戦争で亡くし、毎年参列している長崎市の島田フジ子さん 【仲野乃々佳・祐子記者】



長崎の祖母と一緒に初めて参列した愛知県名古屋市の増田景那さん 【仲野乃々佳・祐子記者】



亡くなった父の遺影を手に参列した長崎市の越本千加さんと記者 【館山慶・利賀子記者】



福島県相馬市から式典に参列した鈴木里菜さん 【館山慶・利賀子記者】

平和へのメッセージ 2014

69回目の「ながさき平和の日」を迎えた今年、平和祈念式典に出席した方たちに、それぞれの思いをこめたメッセージを書いてもらいました。

見る 聞く 話す 形はいろいろ非核への思い

9日、青少年ピースボランティアとして長崎で平和活動をしている、犬塚真菜さんにお話をうかがいました。



あこがれから平和活動を始めた犬塚さん

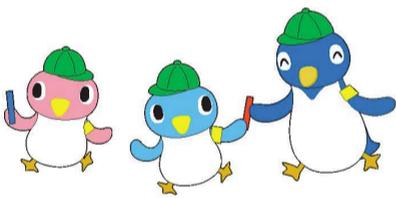
時、平和学習発表会で活動するピースボランティアの方を見て、かっこいいと思った事が、参加するきっかけだったそうです。

被爆地から伝えたい思い 若者の力で後世に語り継ぐ



犬塚さんと一緒に平和の大切さを伝えたい!

「核兵器は、あつてはならないもので、被爆者の声や思いを伝えていくことが重要。そして、私たち若者の力が大事」と話してくれました。



【館山慶・利賀子記者】

世界には核兵器など色々な問題があります。ピースボランティアに、ボランティアに参加したりして、平和の大切さを世界に広めていきたいです。

9日、高校生平和大使の竹内彩華さん取材しました。



署名活動中の竹内さん(右から2人目)

「毎週日曜日に行っている高校生一万人署名活動は、高校生が声をかけるとたくさんの方が足を止めてくれます。高校生だからこそできる活動だと誇りに思っています」と話してくれました。

【仲野乃々佳・祐子記者】



子ども、孫を抱き締めてやってくださいという辻郷國昭さん
【上原 龍樹・晶子記者】



平和が世界中の子どもたちのためにあることを望むハニー・ウィレンさん
【上原 龍樹・晶子記者】



原爆が2度と落とされないことを望む長崎市の増永美保さん
【瀬津田学・芳子記者】



青少年ピースフォーラムのため長崎を訪れた静岡県焼津市の中学3年生・鈴木彩音さん
【瀬津田学・芳子記者】

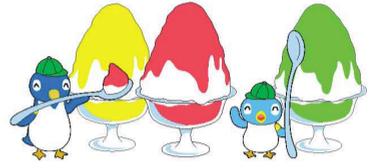


戦争ではなく平和を望む、フィリピンとグアテマラのボーイスカウトの二人
【切山 亮太・美樹記者】



みんなが仲良くしてほしいという長崎市の宮口キワ子さん
【切山 亮太・美樹記者】

長崎から世界へ 平和を発信 ニューヨークとの交流



9日、被爆者の早崎猪之助さんが、ピースネットと、ニューヨークにいる人たちに被爆体験を語る活動を見学させて頂きました。ピースネットとはインターネットを通じて長崎の被爆



恐ろしい体験が活動の原点という早崎さん



最新技術で平和活動をする早崎さん

者たちと遠隔地の人たちが、互いの表情や声を確認しながら効果的に平和学習ができるシステムです。



【相良明日香・美紀記者】

早崎さんは「原爆の怖さと平和の大切さを伝えたい。永遠の平和を祈ります」とおっしゃっていました。

平和を祈る 高校生の活動

被爆者の思いを受け継いでいく



活動の広がりが今後の目標と語る竹内さん



言葉は人と人をむすぶ

朗読による記憶の継承

天野紘(あまのひろし)さんは、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の朗読ボランティア「被爆を語り継ぐ永遠の会」のコーディネーターです。天野さんの講座を受けた皆さんは、今年4月から、学校をはじめ様々な場所で朗読会を開いています。



永遠の会のメンバーは熱心で楽しいと話す天野さん

「朗読を聞いた人に、内容を理解してもらおうだけでなく感動してもらいたい。実際の朗読を聞いた方から色々な感想が返ってくるのが嬉しい」と言います。

動き始めたばかりの永遠の会。天野さんは、被爆者が少なくなる中で、



天野さんとおやこ記者

他の誰かがではなく、みんなまで語り継いでいきたいと考えています。

僕は、朗読には感動を伝える技術も大切だと知りました。天野さんの「話すように朗読しよう」という言葉が心に残りしました。

【瀬津田学・芳子記者】

音楽で平和を伝える

平和の灯を永遠に

長崎のピアノ講師・村川千佳(むらかわちか)さんは、長崎原爆でおぼを亡くしました。その後、被爆者の故・渡辺千恵子(わたべちえこ)さんの人生を元にした合唱組曲「平和の旅へ」の演奏をきっかけに、13年前から平和関連の演奏をしています。昨年、福岡県八女市星野村



13年間の活動を振り返る村川さん

に灯し続けている広島原爆の残り火をテーマにした合唱曲「この灯を永遠に」をアメリカで伴奏しました。

村川さんは「起こった事実を正しく伝えていくことを大切に、被爆70年の節目を前に今一度襟を正す想いで考え直す



村川さんとおやこ記者

時」と話してくださいました。私は13年も続けたのは大変なことのはずなのに、気がついたら13年経っていたと笑顔で話す姿に感動しました。いつか一緒に演奏できたらいいなと思います。

【相良明日香・美紀記者】

それぞれが伝える “平和”

戦争のない平和な世界を祈る想い 子どもたちに伝えたい「平和」



平和への想いを静かに語る山本さん

被爆者の山本政子(やまもとまさこ)さんを取材しました。

戦争が終わった時の気持ちを聞いたら、不安と安心がまざって、空襲の音は聞こえなくなっただけ、戦争が終わったという感じはしなかったそうです。

「戦争を二度としない。平和でいてほしい」という気持ちを伝えたいと話してくれました。「自分が一歩下がれば相手も一歩下がる。人の話を聞いてから、自分の言いたいことを言う」と仲良くなれる」と言っていました。



山本さんと乃々佳記者

守ってきた自分の命が大切だ」とも言っていたので、みんなも自分の命を大切に守ってほしいと思います。

【仲野乃々佳・祐子記者】



社史が伝えた長崎原爆をまとめて 核兵器使用はいけない

「社史で読む長崎原爆」編集委員の一人、森草一郎(もりくさいちろう)さんにお話を伺いました。

当時長崎にあった会社の社史の中で長崎原爆がどのように扱われているかまとめた本がなかったため、本を作ろうと思ったそうです。

17社の社史で、原爆についての触れ方が違い、何ページにわたって記されていたり、ほとんど記されていないなかったりして、とても興味深かったです。

森さんは、「非核三原則、武器輸出三原則を守り、核兵器使用は戦争犯



平和を願い活動続ける森さん



編集会議の様子

罪だということを、日本がもっと主張するべきだ」と話してくれました。私も、やはり戦争は良くないと思います。森さんの「戦争をしない」という思いを、私も伝えていきたいと思っています。

【館山慶・利賀子記者】

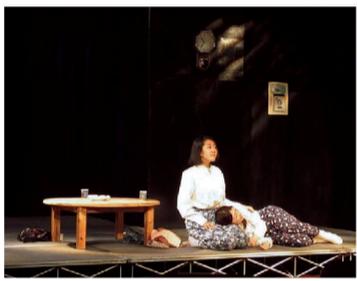
劇で演じる戦争 暴力の残酷さを伝える熱き演者

8月9日、演劇公演の「髪を梳かす八月」に主演した、高校3年生の山本亜子さんに話を伺いました。



小学生時代から演劇を続けている亜子さん

原爆投下一時間前の人々の日常生活を描いた劇なので、他人事とは思えない、とても身近なものとして感じられました。



演技中の様子
(写真提供/塚原政司プロデュース 喜多氏撮影)

「明日に思いを馳せて楽しく生きていた人たちが突然、原爆という暴力で日常を奪われてしまうという残酷さを知ってほしい」との言葉の通り、一瞬でたくさんの人を殺した原爆という暴力に、僕は怒りを感じました。

【切山亮太・美樹記者】

問題は被爆直後だけでは終わらない 被爆二世が伝えたい事

核兵器廃絶を求める被爆者の願いを受け継ぐ「長崎被災協・被爆二世の会・長崎」は2012年5月に結成されました。結成当初から会長を務めている、佐藤直子さん取材しました。



活動の内容を話す佐藤さん

爆を体験していないので、それをどう伝えていくのが難しい」とおっしゃっていました。「被爆の問題は、原爆そのものだけでなく、その後も差別や原爆症への不安がつきまとうこと。2世、3世と続けてその不安を抱えることになる」との



佐藤さんとおやこ記者

お話を聞き、原爆は遠い昔の事ではなく僕たちにとっても身近な事なので、原爆被害について学び、考え、伝えていこうと思えました。

【上原龍樹・晶子記者】



被爆者から若い世代まで

「伝承」思いを伝えることの大切さ 被爆三世・林田光弘さんにお会いして



学びが活動のきっかけという林田さん

高校生平和大使OBの林田光弘さんは、小学校の総合学習をきっかけに、被爆者である祖父の話を聞き、平和や原爆に関心を持ち続けて現在に至ります。高校生の時に、憧れの平和大使に選ばれてヨーロッパを訪問した際、世界中の人々に、

長崎の被爆状況を通じて平和の大切さを伝えたいと思うようになったそうです。「若い世代が平和について発信するには様々な難しさがある」と悩んでいた時に、ある被爆者の方から「継承」ではなく「伝承」していい。つまり「思い」をつ

ポジティブな平和 世界みんながのぞむもの



本当の平和を追求したいと話す田平さん

「核兵器廃絶長崎連絡協議会」が国際会議の場に派遣したナガサキ・ユース代表団の田平由布子さんに取材をしました。

活動でもしろいのは、いろいろな立場の人の様々な意見を聞ける事だそうです。核を持ちたい国、核の力に頼りたい国、核に反

対の国、どの立場の意見も賛成できる所があり、田平さん自身の意見を見つめるのがむしろ楽しく、時間がかかったそうです。今は、核に頼って手に入られるのはネガティブな平和で、核に頼らずに手に入れる「ポジティブな平和」こそが本当の平和だと考え

【高橋侑臣・志穂子記者】



田平さんとおやこ記者



高校生平和大使当時の林田さん(1番右)

ないでいけばよいのでは」と助言され、楽になったそうです。「来年は被爆70年の節目の年なので、様々な活動を計画しています」と熱い口調で語ってくれたのが印象的でした。

【沖野雅季・京子記者】

私たちのふるさとで聞いた「戦争体験と平和」を伝えます 家族と話し、戦争体験談を聞き、 平和施設を訪れました



1945年8月9日の原爆投下の日から、長崎は69年目の暑い夏を迎えました。

今年の日本非核宣言自治体協議会(非核協)主催のおよこ記者事業には、全国から166組の応募があり、抽選で選ばれた8組が参加することになりました。およこ記者のみなさんは、長崎の取材に先がけて、それぞれの住んでいるまちで「平和」について事前取材をしました。今回は次の

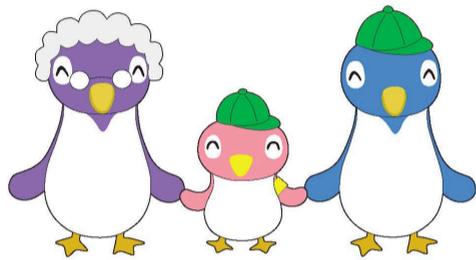
3つのテーマからひとつを選択し、記事にまとめています。

- 1) 家族みんなで考えた平和
- 2) 戦争体験者に話を聞いて、感じたこと
- 3) ふるさとにある平和関連施設や、平和を伝える活動をしている人を訪ねて学んだこと

それでは、およこ記者のみなさんが地元で取材した「戦争体験と平和」についてのレポートをご紹介します(編集部)。



昔、爆弾が落ちた場所にある長岡の「長岡戦災資料館」で、戦争について調べました。家から、車で一時間のところにあります。わたしが一番、心に残ったものは、「空襲直後の中心市街地の惨状」の模型です。



私は、戦争について、祖母から話を聞きました。当時、祖母は9歳で、空爆に怯えながら生活していたそうです。危険を感じ、山へ避難した直後、自宅は空襲に遭いました。祖母たちは間一髪で

中部ブロック

長岡の戦争



町は、真っ黒でした。それに、家は焼けてボロボロでした。わたしは、たくさん爆弾が落とされて、人がたくさん亡くなるなんて、戦争はこわいと感じました。
〔仲野乃々佳・祐子記者〕

僕は戦争中も怖くありません。この世から無くしたいと思いません。無くすための取り

東北ブロック

祖母の戦争体験



難を逃れましたが、逃げ遅れた多くの方が犠牲になったそうです。祖母は「あの怖さは、69年経った今でも、忘れる事はできない」と話してくれました。そして、「多くの戦争体験者が亡くなり、あと何年かしたら、戦争の怖さや悲しみを伝える人がいなくなってしまう。でも、若い人たちにあんな体験をさせてはいけません」と。そう話す祖母の目から、涙がこぼれ落ちました。その涙が、全てを物語っているような気がしました。
〔館山慶・利賀子記者〕

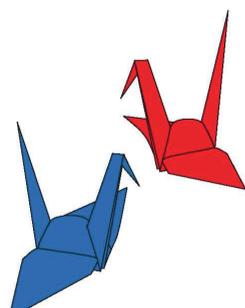
僕は戦争中の野球の状況について調べるために、東京ドームにある「野球殿堂博物館」図書室の司書小川晶子さんにお話をうかがいました。明治5年に日本に野球が初めて伝わり、昭和9年にプロ野球がスタートしました。しかし、野球にも戦争の影響が出始め、昭和15年には、英語使用が禁止となりました。「ストライク」は「よし」、「ファール」は「もとい」になり、「スタルヒン」というロシア人投手は「須田博」と改名させられました。いよいよ戦争が激しく



近畿ブロック

あきらめたらあかん!

組みは、「平和、戦争に関心を持つことだ」と、岡田さんは言われました。「自然が起こすものは災害、人間が起こすものは戦争」という言葉も印象的でした。みんなが仲良く助け合っている世界を目指してがんばらなあかんと思いました。
〔切山亮太・美樹記者〕



関東ブロック

戦争中の野球の状況と「鎮魂の碑」



なった昭和19年には、野球が全面的に休止になりました。プロ野球等で活躍した選手も徴兵され、「沢村賞」の名前で有名な沢村栄治投手も三度戦地へ行き、終戦の前年に戦死しました。博物館のそばに戦死したプロ野球選手の功績をたたえる「鎮魂の碑」があります。その前に立つと、野球ができなくなった選手たちはどんな思いだったのだろう、僕が野球ができるのは、今の世の中が平和で、それはとても貴重なことなのだ、と実感しました。
〔沖野雅季・京子記者〕



7月9日、学校で平和学習があり、全校児童が梶矢文昭さんの被爆体験を聞きました。梶矢さんは元は小学校の校長先生で、20年くらい前から被爆体験を語られているそうです。梶矢さんは小学1年生の時に、広島市内で被爆しました。その時の様子を、ご自身で描いた絵を使って話してくれました。

梶矢さんは「平和に関心を持ち、色々な事に参加してほしい。今のうちに被爆者からたくさん話を聞き、大きくなったらそれを伝えてくれると嬉しい」とおっしゃっていました。

皆さんは「人間魚雷」とは何か知っていますか？「人間魚雷」とは人が魚雷の中に乗り込み、自ら操縦して敵に体当たりする特攻兵器のことです。大分県の日出町には人間魚雷「回天」の实物大の模型と回天作戦に関わった殉職した戦没者の霊を祀っている回天神社があります。

人間の命を兵器の一部として戦うなんて悲しすぎます。再び戦争を繰り返すことのない平和な世の中になるよう、回天の悲しい歴史を皆さんに知って欲しいと思います。

【相良明日香・美紀記者】

九州ブロック

平和を願う戦争遺跡 ～人間魚雷『回天』～



第二次世界大戦中、僕の住む沖縄では地上戦が行われ、軍人だけでなく、多くの人が犠牲になりました。

今回の取材では「ひめゆりの塔」へ行きました。沖縄戦でなくなった「ひめゆり学徒隊」の慰霊碑です。戦時下、僕より少し年上のお姉さんたちが兵隊さんの看護などの従事をしていてと知り驚きました。

壕の中は暗く、こわいです。それに、明かりを付けたらアメリカ兵に見つかるので明かりをつけられません。食事も満足に摂れず、一日にテニスボールくらいの大きさの



沖縄ブロック

沖縄戦から学ぶ戦争

おにぎりが一個と知り、悲しくなりました。

陸軍からの解散命令が出たあとは死に場所を探したり、手榴弾で自決したり、動けない味方の兵隊さんたちに毒入りスープを飲ませたり……

戦争ではどんな人も被害者にも加害者にもなるおそろしいものだと感じました。

近くにある平和の礎には沖縄戦で亡くなった多くの方の名前が刻まれています。これから先、僕は絶対に戦争をしてはいけなくと強く思いました。

【上原龍樹・晶子記者】

中国ブロック

梶矢文昭さんの被爆体験を聞いて



僕は戦争のことを全然知りません。

今回取材したのは、高知市の平和資料館「草の家」です。僕の住む高知市でも、空しゅうがあつてたくさんの方がなくなり、町の何もかもがなくなつたことを初めて聞きました。「子どもたちが何人も死んだ。学校のテストも戦争のことばかりだった」という岡村正弘館長の言葉が僕の心につきささりました。赤紙という紙が来ただけで、戦争に行かなくてはならなかったこと、日本人は殺されただけでなく、外国の人もたくさん殺した

した。「原爆は、ヒロシマ、ナガサキで終わり。使つてはいけない。使わせてはいけない」という梶矢さんの言葉がとて心に残りました。

梶矢さんの言葉を、僕はたくさんの人に伝えていきたいと思いました。

【瀬津田学・芳子記者】

四国ブロック

戦争とは何だろう、平和とは何だろう



こと……そんな話をたくさん聞いて、僕はとても悲しくなりました。今僕は毎日平和に生活ができているので、なんて恵まれているんだと思いました。

平和教育のおかげで、僕たちは、人の命は地球より重いと知っています。けれど、戦争は人の命を鳥の毛よりも軽く変えてしまいます。僕は、これからずっと平和の大切さを世界中の人に伝えられるようになりたいです。

【高橋侑臣・志穂子記者】

編集集
後記



事務局だより

おやこ記者新聞は今年で7年目を迎えました。今年のおやこ記者事業は、台風11号の影響が心配されましたが、全国から8組の親子が集まり、原爆投下から69年目の夏を迎えた長崎で取材活動を行いました。おやこ記者の皆さんが地元へ帰ってから、家族や友人と一緒に平和について考え、今回取材した方々の思いを伝えてくれることを期待しています。取材風景はホームページでも公開しています。おやこ記者の取り組みを見て、皆さんも平和について考えてみてください。

【松尾涼子】

東北ブロック

宮城県気仙沼市

館山慶・利賀子記者

平和への思い、伝えたい

長崎での4日間の取材活動、記事作成を通して改めて思った事は、「平和ってやっぱり大事」という事です。実際に被爆者の方からお話を聞いたり、平和祈念式典に参列して、戦争はいけないと強く感じました。世界平和が実現するように、戦争や核兵器のあり方に、



を伝えたい。長崎でも長崎の人々の思いを伝えていきたいと思っています。

近畿ブロック

大阪府茨木市

切山亮太・美樹記者

平和の大切さを学んで

長崎では、平和の尊さについての発信がたくさんあることに驚き、また多くの人から平和のありがたさについて学ぶ事ができ、本当に感謝しています。これらの事をより多くの人に伝えるために、考え、生きていきたいと思っています。



関東ブロック

神奈川県相模原市

沖野雅季・京子記者

「平和」を学んだ4日間

これまで戦争や平和について、親子で話したことはほとんどありませんでした。今回、インタビューや平和祈念式典に参加させていただき、戦争は色々なものを奪う、やっつけられない事だと実感しました。この4日間は、私たちに与えてくれた大切な4日間でした。



中国ブロック

広島県広島市

瀬津田学・芳子記者

すべての出会いに感謝

たくさんの人、ものに出会い、過去を学ぶ事と未来を考える事のバランスの大切さを実感しました。今回の体験は私たちの人生の財産です。私たち普通の親子でも、こうして平和について発信できるんだという自信になりました。これから、自分に何ができるかを



考え、行動し続けたいと思っています。

中部ブロック

新潟県新潟市

仲野乃々佳・祐子記者

長崎で学んだ平和の大切さ

初めて長崎に来て、「戦争はこわい」と思いました。爆弾がたくさんの人たちの命をうばったことを知りました。わたしは新潟にもどったら「平和は大切なんだよ」と伝えて、山本さんと竹内さんから聞いた話や、長崎で勉強したことをたくさんの人に教えていき



たいです。

四国ブロック

高知県高知市

高橋侑臣・志穂子記者

会話をして仲良くなろう

僕は、初めて本当の新聞記者になれてワクワクしました。色々な人に会え、話ができ、深く知り合えたので、すごくうれしかったです。一番に残ったことは、取材をした二人とも「平和になるには、会話をしなければならぬ」と言っていた事です。



僕は、だれとでも会話をして仲良くなり、他の人にもこの事を伝えたいです。

九州ブロック

大分県別府市

相良明日香・美紀記者

平和の種を持ち帰ります

取材前は原爆について漠然と怖いというイメージしかなかった。今回原爆や平和について日常的に活動している方々から取材して原爆は改めて怖いなど感じました。また、次の世代につなげようとして活動している人たちがたくさんいることを知りました。色々な人の



思いが詰まった「平和の種」を私たちが受け取り、そのことを忘れず、今回学んだことや感じたことを別府に帰って色々な人に伝えます。

沖縄ブロック

沖縄県那覇市

上原龍樹・晶子記者

親子記者に参加して

初めての記者として取材、記事作成は難しかったけど、スタッフの方々に助けてもらい完成できて嬉しかったです。平和の大切さ、原爆の悲惨さ、伝えることの難しさを学んだ4日間でした。沖縄に帰っても、今回の経験を忘れずに、家族や友



達に伝えていこうと思いましたが、核兵器は悪いものだと改めて思いました。

学生ボランティア12名がおやこ記者を強力サポート!!



今年も、長崎県立大学シールボルト校情報メディア学科の金村ゼミ生を中心に、12名の学生がボランティアスタッフとして参加してくださいました。

(写真上段右より)

◆今あるあたり前を大切にしながら生活していきたいです。 島川奈都美

◆正しく聞いて正しく伝えると、そこに平和の架け橋が生まれる。 梅川 隼人

◆長崎から平和の種を全国にまくことで、平和の意識を高めていく。 浜脇 侑也

◆母と子の絆を目の当たりにして、これが平和なのだと思えて気が楽になりました。 田中 寛明

◆平和の継承ではなく、伝承することが平和へと繋がる。 松永 和真

◆平和について改めて考える、充実した時間を過ごせました。 田淵ほのか

◆平和を築くため、今私たちに求められているのは「知る事」である。 櫻井 侑

◆平和が「番だ」ということを再確認でき、充実した4日間でした。 池上 彩女

◆平和についての考えを共有し、明るい未来を取材できてよかったです。 田中 楓

◆若い世代の平和活動の気運が高まっていることが感じられました。 濱田 里穂

◆まずは興味を持ち学ぶことが、平和への第一歩。 柳川智栄美

◆今年初めての参加で、多くの新しい発見をすることができました。 竹口美咲希